

中華民国(台湾) 台中日本人学校

平成13年度派遣 井上 晃男
(札幌市立山鼻中学校)

I. はじめに

私は、2001年4月より2005年3月までの四年間、台中日本人学校へ派遣されました。この度の帰国に際しまして、簡単ではありますが台湾および台中日本人学校で送った四年間をまとめてみました。台中日本人学校といえばご記憶に残っている方もおられると存じますが、今から6年前の1999年9月21日に、本校がある台湾中部を震源としたマグニチュード7.3の大地震が起こり、1981年12月以来長きに渡って子どもたちが親しんできた旧校舎（当時の所在地は台中縣太平市）は、ほぼ全壊してしまいました。その後、李登輝前総統のお力添えで台中市郊外の台中縣大雅郷の地に新しい場所が決まり、2001年2月に新校舎が完成しました。その間、台中市内にある幼稚園の園舎の一部を借用する等、不便な環境での学校生活を余儀なくされました。たくさんの方々善意に支えられて完成した新校舎での学びも五年目を迎え、子どもたちは恵まれた環境の中で、のびのび育っています。

グラウンドから校舎を望む



II. 台湾について

1. 台湾の略史および概要

台湾では1949年以来、国民党による一党独裁政治が続いてきましたが、蒋介石総統の死後、政権を引き継いだ長男の蔣経国総統時代から、戒厳令の解除など緩やかながら民主化が進められました。前総統の李登輝氏の時代に、経済的に大きく成長を遂げるとともに政治の自由化・民主化が進められました。2000年5月20日に野党であった民進党の陳水扁氏の新総統就任により、劇的な政治改革も起こり、現在の政治状況に至っています。

一般的には「台湾」の名で世界に認知されていますが、正式な国号は「中華民国(R.O.C Republic Of China)」です。孫文により1911年に成立したアジア最初の共和国で、現在でも建て前としては、南京を首都とし、(台北は臨時の首都とされています)中国全土を支配していることになっています。しかし、実際は台湾本土と一部の離島のみ支配にとどまっています。

前述のように、2000年5月から総統についた陳水扁氏が率いる民進党や前総統の李登輝氏の率いる台湾團結同盟の方々、台湾の独立を主張しており、国内の世論も現状の維持を支持する人と独立国家としての台湾を支持する人の二つに分かれています。前回、2004年の総統選挙では僅差で陳水扁氏が勝利したものの投票の無効を叫ぶ国民党支持者が台北で大規模なデモを行うなど、台湾独立に向けた陳水扁政権の動きは、中国だけでなく国内の国民党支持者にもブレーキがかけられている状況といえます。実際に台湾の方々の話を聞くと、独立に向け中国との関係を悪化させるよりも正直なところ現在のような関係のままでも良いという方々が多数いることは事実のようです。2004年の秋に行われた立法院選挙(日本に国会にあたる)選挙では、独立にむけた憲法改正を掲げた与党民進党が、野党連合に敗れ、与党も政策の見直しを迫られるという結果となりました。これも急速な改革に対する国民自らのブレーキととらえられます。

台湾では、西暦よりも、中華民国の開国記念日（辛亥革命の翌年 1912 年 1 月 1 日）が制定された年を元年とした「民國」という年号が広く使われています（今年が民国 94 年です）。人口はおよそ 2200 万人。人口密度は、約 680 人で世界第 2 位。人口の大多数（95%）を漢民族系が占め、そのほか「原住民」と総称される先住少数民族（現在 12 部族が原住民として認められている）の方々が約 5%生活しています。

経済的には、世界有数の外貨保有高を誇る国といわれるだけあり、人々の生活も我々が想像する以上に豊かと言えます。（市内を走る欧州製の高級車の割合は、世界一といわれている。）しかし日本に比べ貧富の差が大きいことも事実です。現在、台北から高雄を結ぶ新幹線の建設工事が急ピッチで行われている事と並行して、高速道路網などの整備が国の力で進められています。しかし、公的年金などの社会保障の制度などは充実が望まれます。

私の赴任した台中市は、北回帰線のわずか北方（北緯 24.1 度）に位置し、台北から南へ約 170 km、高速バスで約 2 時間のところにある台湾第 3 の都市です。市の人口は約 100 万人、台湾中部では最大の都市としての役割を担い、近郊には台中港をはじめ工業区や加工区を従えた都市です。2003 年より、中部科学工業園区という半導体や液晶などハイテク関連の工業団地の大規模な造成が始まり、つい最近までサトウキビ畑やスイカ畑だった場所が、巨大な工場群に生まれ変わろうとしています。



2004 年春のようす



2004 年夏のようす



2004 年秋のようす

2. 台湾の気候・風土

台湾は東南アジアと東アジアの中心に位置し、かつてポルトガル人が初めて海上から台湾を見た時、「イラーフォルモサ（麗しの島）」と賞賛したほど、緑に恵まれた美しい島です。

台湾本土の面積は、3 万 6 千 km² と日本の九州地方よりやや小さいくらいの大きさで、南北に長く、島を東部と西部に二分するように 3000m 級の高山（玉山や合歡山など）が峰を連ね、中央山脈を形成しています。

台湾の中部都市・嘉義市の南部に北回帰線が横断し、熱帯から亜熱帯気候に属する台湾は、一年中緑におおわれ、色鮮やかな南国の花が絶えず咲き乱れています。

温帯気候の日本のようにはっきりした四季の変化はみられず、「長い夏と短い冬」があるのみです。

夏至の日のスナップ
影が身体の真下に



台中市の気候は亜熱帯性気候に属し、一年のうち 3 月から 10 月が夏、11 月から 2 月が冬（乾季）と

いうように区分します。年によって多少の寒暖差はありますが、だいたい旧正月明けの 2 月中旬

頃からだんだん暑くなり始め、4月には気温が25℃以上にまで上昇します。5月～6月にかけては梅雨期となりジメジメした日々が続きます。また、スコールが多いのもこの時期の特徴です。

その後7月から8月にかけて一年で最も暑い時期を迎え、気温は日中35℃前後にまで達し夜は熱帯夜が続きます。しかし比較的湿度が低いため、日本の首都圏の夏よりは過ごしやすいということです。また、7月から9月にかけては台風シーズンでもあります。台湾はその名の通り、台風の通り道に位置していることはご存知と思いますが、台中市を台風が通過することは思いのほか少なく、一年間に1から2個程度です。しかし、そこは亜熱帯だけあって台風が来るたびに洪水や、土砂崩れ・山間部では土石流などの災害に見舞われ、被害も多く出ています。私が台中市に赴任した2001年と四年目の2004年は台風の当たり年で、山間部のみならず台中市内でも水害による被害がありました。2004年の水害では、ダムの取水設備が破壊され、市内のほぼ全域が3日間ほど断水するという騒ぎもありました。9月に入っても日中30℃前後の日々が続きますが、9月後半頃から10月、11月にかけて次第に気温が下がりはじめます。気温が下がると言っても25℃から26℃程度はありますが、暑い時期との気温差が大きいために過ごしやすく感じられます。12月から2月ごろの気温は最低でも10℃前後で、雨はほとんど降らず空気も乾燥しています。

地理的には、台中市が位置する中西部は南部にかけて豊かな平野が広がり、農業の機械化も進み、米、野菜・果物などの栽培が盛んに行われています。台湾中部の稲作は、二期作が行われていますが、さすがに地力が落ちてしまうために、二回栽培した後は、小麦を栽培し、さらにその後は、アブラナを栽培して、地力を回復させているようです。また標高1000mを越す山岳地帯では、主に茶やキャベツなどが栽培されています。そのほか山間部ではピンローやし（覚醒効果のある嗜好品）やリンゴ・ナシといった農産物の栽培が行われています。かつて台湾を代表する農作物であったサトウキビなどは、近年フィリピン産やインドネシア産の価格の安い砂糖に市場を奪われ、作付面積はどんどん減少しているのが現状です。特産のバナナやパイナップル・スイカなどは、一年中味わうことができます。

台中市は、年平均気温は約22℃と暖かく、台湾でも最も住み良い町とされています。また農産地や漁港に近いこともあり、生鮮品や生活用品の価格も台北や高雄に比べ安いことなどがあげられるようです。

資料

台中市の年間平均気温（最高・最低）・降水量・服装 ※年によって若干異なります

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
最高気温(℃)	20	22	25	29	31	33	34	34	32	29	26	24
最低気温(℃)	9	13	14	19	22	24	25	24	23	20	15	14
降水量 (mm)	35	64	104	129	246	341	274	342	155	23	19	23
服装 (注)	B/C	B/C	B	A/B	A	A	A	A	A	・・A	B	B

注：服装・・A－半袖シャツ、B－トレーナーなど、C－フリースなど

3. 言語

台湾の公用語は、日本で「北京語」と呼ばれる言語（中国での公用語）に相当し、台湾では『國語』と言われています。「北京語」と『國語』には、ひとことで言えば言語運用面や発音面におい

て“英国英語とアメリカ英語のような隔たり”があるといえますが、最大の違いは『北京語』が簡体字を使用するのに対し、『國語』では繁体字を用いるという点です。また、発音の表記方法においても『北京語』が“ピンイン”と呼ばれるアルファベットを用いた表記法なのに対して、『國語』では“國語注音符號（“ㄅㄆㄇ”など）”を採用しています。

そのほかに、方言の台湾語（『台語』）が家族や親しい人達の間で使われています。近年、小中学校のカリキュラムに台湾語が組み込まれるようになりました。

台湾では、英語の学習が盛んで中高生の英会話の能力は日本に比べ高く、若い世代の人たちには英語で話しかけると大体は通じます。また、日本統治時代に日本語教育を受けた年輩の人々や、最近の日本のドラマやアニメ・ゲームに興味を持ち日本語の学習経験がある若者なども多く、意外な場面で日本語が通じることもあります。

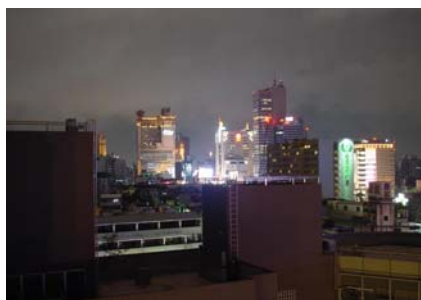
4. 台湾の治安

台湾は、アジアの中では比較的治安が良く、「日本人が安心して旅行できる近い外国」として今もなお日本人旅行者の人気を集めている土地柄ですが、現在、都市部を中心に犯罪が増加し、治安が悪化しつつある状況です。実際に私の住んでいる地区でも何度か銃撃事件がありました。外国人をねらったスリや置き引き・引ったくりのような事件のほか、最近はいわゆる「振り込め詐欺」や自動車盗のような「組織的な犯罪」に巻き込まれるケースもあります。

また、交通ルールが厳守されていない台湾では、バイクと人の接触事故も多く発生しています。



「廟」が市内のあちこちに



市内中心部の夜景



「パチソコ」屋もあります

Ⅲ. 台湾の教育事情について

1. 台中日本人学校の概要

台中日本人学校校舎は、市内から北西へ12kmほど離れた、丘陵地に位置しており、周囲を田畑に囲まれた土地で、校舎からは台中市を一望できます。近くに空軍基地があり、空軍機や民間機が学校の上を横切る光景は頻繁に見られますが、市内の喧騒からも離れた、教育を行う上においては絶好の環境と言えます。児童生徒数は、小・中学部合わせて137名（2005年3月現在）、各学年単学級の学校ですが、教職員を含めて家族的な雰囲気



↑ 震災三周年記念行事
李登輝前総統を迎えて

のする和気あいあいとした楽しい学校です。教職員の数は、派遣教員が校長・教頭を含め15名、台湾で採用された職員6名（教員3名 事務職2名 用務1名）となっています。

名称

台中日本人学校 (中国語名) 台中縣日僑学校

所在地

中華民國台湾省大雅鄉秀山村平和南路 33 號

沿革

- 1976 年 4 月 台中日本語補習学校として開校する。
- 1977 年 1 月 台北日本人学校台中分校として、日本政府より認可される。
- 1977 年 4 月 台中市日僑学校として認可される。
- 1980 年 4 月 台中日本人学校として独立する。
- 1981 年 12 月 台中縣太平郷に移転し台中縣日僑学校に校名を変更する。
- 1999 年 9 月 台湾大地震により校舎崩壊。
- 1999 年 10 月 台中市エンジェル幼稚園を仮校舎として借用、移転。
- 2000 年 3 月 台中縣大雅郷に仮校舎を建設、移転する。
- 2001 年 2 月 新校舎に移転。
- 2001 年 5 月 新校舎の再建記念式典をとりおこなう。

規模

小学部 6 学級、中学部 3 学級、生徒数 137 名 (平成 17 年 3 月現在)

中華民國私立学校法第 75 条の規定による外国僑民学校設置弁法に基づき認可されている私立学校。

台中日本人学校の教育目標

生きる力と国際感覚並びに国際性を身につけた心身ともに健全な子どもの育成を図ること。

教育計画における特色 (2004 年度)

○中国語(日本語)と英会話

全学年で中国語(日本語)、小学部 5 年生以上で英会話の授業が行われています。

○朝学習の充実

始業前の毎日 15 分間を朝学習の時間と設定し、算数(数学)と国語を 1 週間のサイクルで交互に実施。

○現地理解を進めるための取り組み

全教科を通じて現地理解教育が行われています。特に現地理解を深めるために「台湾の伝統文化を学ぶ日」・「地元校との交流会」などの行事が組まれています。また、職員間でも「現地校の見学」や地元の高校に出向き「日本語ボランティア指導」などを行っています。

○児童会・生徒会

小中併設校のため委員会組織を小学部と中学部で分担して受け持っています。本校の場合は小学部が「環境」「学習」「体育」の各委員会を組織し、中学部が「環境」「学習」「体育」「広報」の各委員会を組織し、運動会や学習発表会などの行事や全校で行う外回り清掃では、児童会・生徒会が合同で活動を行っています。

○部活動

部活動は小学部五年生以上の児童・生徒の全員参加で、毎週火曜日・木曜日の放課後1時間実施しています。ソフトボール・バスケットボール・バドミントン・卓球・アスレチック・コンピュータ・音楽・ホームメイキングなどの部が活動を行っています。

○国際性

海外校の特色として、教育課程全てを通して「国際性豊かな児童・生徒」の育成が掲げられています。2004年度は、日本の伝統を学ぶことに重点を置き、小学部では「花笠音頭」中学部では「和太鼓」に取り組み、地元校との交流会や中学部は市内のデパートでも発表を行いました。

2. 台中市の幼稚園

台中市内の幼稚園は、一般的な幼稚園のほかに小学校と併設されているものや英語教育など個性的な教育を行うものなどがあります。日本人の子どもの多くは日本人学級（『日僑班』）を併設している幼稚園に通っています。また、現地の（日本人学級のない幼稚園）に通う子どももいます。いずれの場合も台湾の子ども達の中に交じって保育されるため、言語、習慣、給食の味の違いに、初めは戸惑う子どももいますが、次第に慣れていくようです。また、台湾では共働きの家庭が多いこともあり午後6時くらいまで幼稚園で過ごす子どもも少なくありません。

3. 現地の小中学校および高校

台湾の教育制度は、日本と同じ6・3制で、それぞれ国民小学校・国民中学校と呼ばれています。また、日本の高校にあたるものが高級中学です。また、職業教育も盛んで五年制の職業学校も数多くありますが、最近の傾向は大学進学率の高まりから、日本同様に、普通科の高級中学に進む子どもが多くなっていると聞きます。

近年台湾の教育部（文部科学省にあたる）では、小中のカリキュラムの見直しを図り、九年一貫教育を推進しようという動きが見られます。台湾の小・中学校のカリキュラムは学習内容が非常に多く、英語の授業は小学校5年より、教科として扱われておりその内容も会話を中心としたコミュニケーションの育成に力点がおかれています。

台中日本人学校では、一昨年度より中学部2年生が、台中市内にある私立の新民高級中学國中部に5日間の体験入学を行っています。子どもたちは、はじめのうち台湾の中学校の時間割に驚きます。朝8:10より授業が始まり、17:35までの一日9時間の授業です。学習内容も日本の指導要領に比べて高度で、数学では三角関数、理科では有機化学など日本の高1レベルの内容まで学習しています。

都市部では、進路に関しての意識は高く、国立の高校への進学することを目標に勉強に取り組んでいる中学生が多く、夜遅くまで進学塾に通う子どもたちの姿も目にします。また、私立の高校では、中高一貫教育を柱に大学進学に力を入れた学校も増えてきています。日本ではあまり見られなくなってきましたが、試験が近づくと教科書を片手にそれぞれの学校のスクールバスを待つ高校生の姿が、印象に残りました。

また、台湾の小中学校では学校ごとに、音楽班や舞踊班などの特別なクラスを設置し専任の教師の指導で高いレベルの活動を行っています。本校と定期的に交流会を開いている地元の大雅國中では、國樂班（中国の伝統的な音楽）が設けられており、国内でもトップクラスの実力と言わ

れています。また、小学部 6 年生が修学旅行で交流している台湾南部にある三地國小では、原住民の音楽や舞踊の指導に力を入れており、やはり国内でトップクラスの實力を持ち各地で発表会を行うほどです。



三地國小の子どもたちの発表 2003. 11

4. 現地での塾・習い事

帰宅後、子どもたちが通う各種教育施設も数多くあります。台湾はもともと教育熱心な土地柄ですし、特に最近の教育熱もともない、安親班と呼ばれる学童保育所や補習班と呼ばれる学習塾・英語教室・ピアノや心算（暗算）や珠算など習い事の看板を街中のいたるところで目にします。小学校の下校時刻には、学校の横に母親の運転するスクーターや安親班や補習班のワゴン車が横付けになり、子どもたちを送っていく姿が一般的です。

日本人の子どもたちの中には、台湾の子ども達に交じって頑張っている子も数多くいます。ピアノやエレクトーンは、ヤマハやカワイなどの音楽教室でグループまたは個人のクラスがあり、その他にスイミングスクール、絵画教室、粘土教室、英語教室、「公文」（算数、英語、中国語のみ）などで学んでいます。

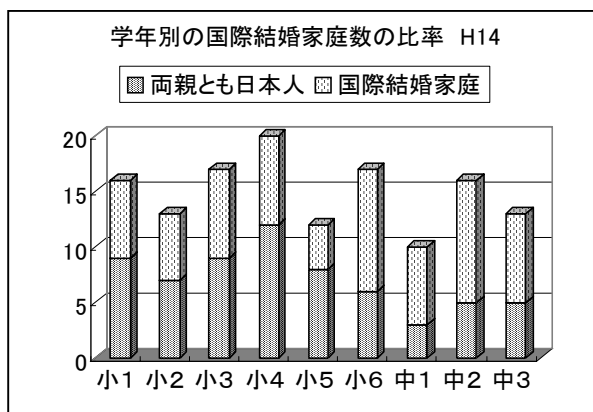
IV. 台中日本人学校の持つ課題と取り組みについて

経済や文化など各般にわたるグローバル化が進む中で、日本の国際的な活動は著しく拡大し、その活発化の度合いは急速に深まってきています。これに呼応するかのように、長期間にわたって在留する日本人の数も増加しており、同伴する義務教育段階の子ども数も増えています。

これら海外に在留する子どもたちに対し、日本国民にふさわしい教育の機会を確保するとともに、帰国後に日本での生活に円滑な対応を図るために、生活面および学習面での指導において、日本人学校をはじめとする在外教育施設の教育活動が問われています。

各在外教育施設における課題は、その設置された条件によって大きく変わりますが、台中日本人学校の持つ特徴は、他の在外教育施設日本人学校に比べ、国際結婚家庭の子ども比率が高いことにあります。「国際結婚家庭の子どもへの学力、生活、進路の保障を目指すために」という主題で台中日本人学校での研究を始めた 2002 年度（平成 14 年度）は在籍数 135 名中 71 名が国際結婚家庭の子どもで、全体の 53% を占めていました。この比率は台湾にある 3 つの日本人学校の中でもずば抜けて高い数字で、現在もこの比率は高まりつつあります。

台中日本人学校の教育課程を推進していく中で、国際結婚家庭の子どもとどのように関わっていくのか、国際結婚家庭の子どもへの学力の確実な習得と定着をいかにして図るのか、国際結婚家庭子どもへの適正な進路指導をどのように行うかなど、国際結婚家庭の子どもとの関わりが大きな課題となってきました。この課題への取り組みが国際結婚家庭以外の子どもとの関わりにおいて「波及効果」をも



たらずのものであると考え、「国際結婚委員会」という名称の特別委員会を設置し、国際結婚家庭の子どもの実態把握に取り組んできました。また、アドバイザーとしてご本人も国際結婚をされており、お子さんの学力、生活・進路に苦勞をされた現在国立の大学で講師をされる王先生にお願いしたほか、国際結婚家庭の保護者会である「向日葵会」とも連携し取り組んできました。

（１）学力の保障に向けた取り組み

台中日本人学校では、子どもたちの学習の充実と進路保障・指導を目的に「基礎基本委員会」という名称の委員会もあわせて設立されました。2001年度に国際結婚家庭の実態調査を行いその中で、子どもたちに基礎・基本的な事項の確実な習得と定着を図る必要性が明らかになりました。そこで、2002年度より特に算数・数学を重点に取り組んできました。主な活動内容としては、毎朝 15 分間を学習の時間として設け、算数・数学科における基礎・基本的事項の確実な習得と定着をはかり、全学級で取り組みを続けました。

2003年度は、活動の二年目をむかえ、前年度の反省をもとにより計画的、継続的な学力の補充を図る目的で、朝学習の時間に教員全員が対応して、各学級複数の体制で全学年が算数・数学のプリント学習と小学部低学年では、週 1 回の読書指導を試みることになりました。

国際結婚家庭委員会の調査の中で、中学生の生徒であっても学習言語としての日本語がおぼつかない生徒が少なからずいて、そのことを保護者が認識できていないケースもあることが判明し、このことから日本語の学力の向上に向けた取り組みの必要性が浮き彫りになってきました。しかし、中学生からの対策だけでは不十分であるため、合わせて小学部低学年から意識した指導も必要であるという観点から、低学年から日本語の習得と読書の習慣づけを狙いとして、朝学習の時間に読書（国語）の時間を週 1 回設定し実施することになりました。

2003年度、小学部 1 年生を担当した私でしたが、当初小 1 は朝学習の枠に入れず実態に応じた指導ということでスタートしましたが、自分の担任した児童 23 名の中には、国際結婚家庭の子どもが多く、中には日本語が話せない児童が 3 名（米国籍・台湾籍・台湾生まれ台湾育ちの日本籍）話す言葉の意味がほとんど理解できない児童が 4 名（台湾籍 1、台湾生まれ台湾育ちの日本籍の児童 3）という状況であったため、委員会の同意を受け、日本語の読み書きの徹底に力を入れることにした。ひらがな・カタカナの正しい書き方の練習を継続的に行うとともに、読みを通して語彙を増やすことにも力を注ぎ実施しました。

その結果、年度末に実施した漢字検定 10 級に学級の児童 23 名のうち 18 名が受験し、全員が合格することができました。（入学当初日本語での対応ができなかった児童も入っています。）

2004年度は、標準学力テストを実施し、指導の効果の調査を行いその中から、新たな課題の洗い出しを行いました。その中で、国語の中にも補ってやるべき点があることが判明し、漢字の書き取り、文章読解などを含めた課題を朝学習の時間で取り組むことになりました。方法としては、朝学習の時間に算数・数学と交互に 1 週間に 4 日間実施しました。昨年度は小 6 を担当しましたので、内容は（火）漢字書き取り（水）文章読解（木）音読（金）視写を基本として取り組みました。この学年の児童の国語能力の差が大きく（家庭では中国語を使って生活する児童の在籍 16 名中 7 名）、漢字書き取りや文章読解では小 4 レベルの問題と小 5、6 レベルの問題を用意し、子どもたちに選択させ、家庭学習と合わせて取り組ませるようにしました。

このように、全校的に国語や算数・数学の基礎・基本的な学習事項の確実な定着に向けて、それぞれの教科担当者と連携を取りながら取り組んでいるのが現状です。

(2) 生活の保障に向けた取り組み

台中日本人学校では、子どもたちの生活の実態把握のために次のような活動を実施し、課題の把握と解決に向けた取り組みを行ってきました。特に訪問懇談は、担任と副担任で実施しているが、国際結婚家庭には通訳の必要性から現地採用教員も同行してもらい、保護者とのコミュニケーションをスムーズに行うことができるようにしていました。

- 家庭環境調査票のまとめと分析・・・4月
- 派遣教員へのアンケート調査と分析・・・5月
- 訪問懇談（家庭訪問）のまとめ・・・6月
- 子どもアンケートの実施・・・・・・・・・・6月
- メンタルヘルス調査・・・・・・・・・・2学期と3学期

また、全教師が個々の子どもの生活状況や子どもが抱える問題の共有化を図り、指導の資料とすべく次のような取り組みを行っていました。

- 子どもを語る会の実施・・・各学期1回
- 個人カルテの作成・・・・・・・・・・学期ごとに記入

これらの活動は、それぞれが別個のものではなく、訪問懇談や個人懇談で出た保護者の悩みや意見、子どもたちの状況を整理して「子どもを語る会」において各担任からの報告を行い、報告をもとに「個人カルテの作成」というように連動させるようにしていました。特に個人カルテは、帰国された担任の学級を引き継ぐ際にも非常に有効でした。また、「子どもアンケート」の分析からは、台中日本人学校で学ぶ子どもたちについて、次のようなことが考察されました。

台湾に来る前には、多くの子どもたちは基本的に日本国内での転校と同様に、学校内での友達関係について一番期待や不安を抱いていると言える。しかし、転入生のほとんどの子どもたちが早い時期に友達ができ、心配事は解決しているようすで、学校への適応はほぼ満足できる状態であると考えられます。また、来る前に楽しみにしていたことは、低学年では台湾の暑さのことや中国語のことについて関心が見られるものの学年が進むにつれあまり気にならないという傾向がなり、むしろ友人関係や学習・進路での心配をする割合が高くなっている。実際に台湾に来てからの生活では、学校の中での生活をとても楽しみにしているが、学校以外では行動の制限が多く、友達同士で自由に外出することが困難な環境であるために少数の友人かあるいは一人で家の中で遊ぶ傾向にあることが分かり、学校生活の中での子供どうしのふれあいが日本以上に重要であるということが明らかと言える。

また、国際結婚家庭の保護者会「向日葵会」と連携し、保護者向けのアンケート調査も行っており、台中日本人学校への要望・意見など悩みなどを吸い上げ、国際結婚家庭の研修会の中での話題として、最も保護者として知りたいことを取り上げることができるようになりました。

(3) 進路の保障に向けた取り組み

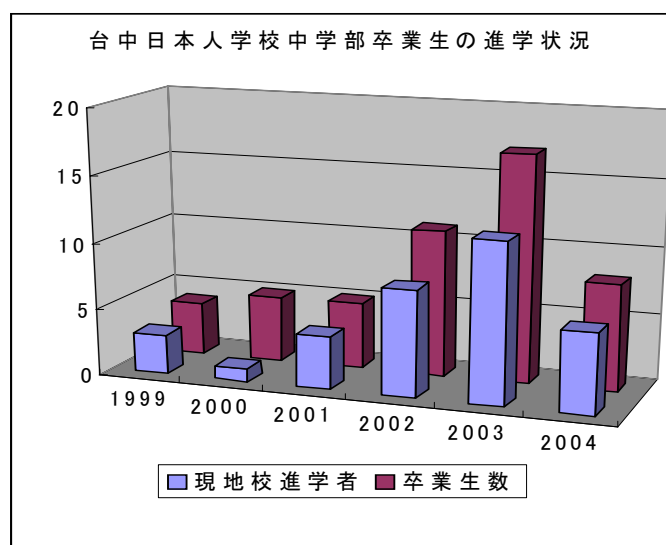
台中日本人学校に通う子どもたちは、P8のグラフにあるように学年が進むにつれ、国際結婚家庭の子ども割合が増えていることがわかります。このことは、台中日本人学校の卒業生の進路と非常に密接な関係があり、学校が抱える大きな課題と言えます。

次ページのグラフからも分かるように、卒業生に占める現地校進学者の割合が極めて高いことが台中日本人学校の特徴です。

◇台中日本人学校からの進学状況

台中日本人学校から現地校へ進学する場合、外国人留学弁法という法律を使って高校に受け入れてもらっているという状況である。台湾にある日本人学校などの外国人学校を卒業した生徒が、高校や大学に進学する際に、通常の試験（台湾の場合、高校入試の段階から統一試験という全国共通試験を受けて進学先を決める。）では、残念ながら日本人学校での学習内容では、どの高校にも入学できません。そのため、この法律は外国人留学生に対し別途試験を行い、その試験結果によって受け入れの可否を決めるという内容のものです。しかし、どの高校もその法律を適用して受け入れをしてくれるわけではなく、市内にある 国立の高校 1 校と私立 2 校のだけが受け入れをしてくれていました。進路担当者を中心に学校長も市内の高校を訪問し、受け入れ先を開拓につとめその結果、現在は国立の高校 1 校・私立の高校 2 校が新たに日本人学校の卒業生を受け入れてくれることになりました。

年度	現地校進学者	卒業生数
1999	3	4
2000	1	5
2001	4	5
2002	8	11
2003	12	17
2004	6	8



◇進路にかかわる課題に対する取り組み

海外校の場合、卒業生の進路先に対する取り組みは日本に比べ、かなり早くから行わなければなりません。特に台湾の高校に進学を希望する場合、入学には「外国人留学弁法」の適用を受け配慮していただくことはできても、中国語が学習言語として十分に身につけていない者にとって、高校での学習は厳しいものがあり、特に過去に国立の台中二中に進学した卒業生の中には、単位が取れず卒業ができない卒業生も数名いました。

その原因としては、保護者の中に台中日本人学校から台中二中への進学は、ほとんど無条件であるという誤った認識があり、(事実卒業生が数名という時代にはそれに近かった)楽をして市内でも有数の進学校に入学できるという安易な考えで進学先を選ぶケースが見られたためです。そのために学校として、毎年実施している国際結婚家庭の保護者との懇談会や毎月の学校だよりの中で、進路に関する情報を全ての保護者に伝えたり、進路説明会に小学部の保護者にも参加を呼びかけたりするなどの取り組みを通し、保護者の意識付けを行ってきました。その結果、小学部 6 年の中には将来的に台湾での生活を考え進学先を台中日本人学校から現地の中学校へ変更し、学習言語としての中国語を身につけたいという家庭も出ています。

また、中学二年生で行っている五日間にわたる現地中学校への体験入学は、子どもたちが学習言語としての中国語の大切さや共通言語としての英語の必要性、台湾の中学校との学習内容の違いなどを知ることで、現地校に進学を希望する生徒だけでなく、日本の高校に進学を希望する生

徒にとっても、学習に対する意欲づけにつながっているようです。

現地の高校への進学希望者が増加傾向にあるため、中学部の選択教科の中に、学習に対応できる中国語を身につけさせる目的で中国語のコースを4コース設置しています。受講者のほとんどは現地校進学希望者であることは言うまでもありません。

V. おわりに

日本全国から集まった、存在感を持った先生方とともに四年間派遣教員として仕事をしてきました。正直なところ自分の力不足を感じさせられることばかりでした。四年間の派遣期間で自分の専門教科（中学理科）を担当できたのは一年間だけで、常に授業の下調べと教材作りに追われていたような毎日だったようにも思えます。しかし、その中で中学校での指導経験しかない自分にとって、小学校1年生の担任という経験は二度とできない体験だったと思います。子どもたちにとって（保護者にとっても）みると、小学校経験の無い教師に指導されているわけですから、不安な面が多々あったと思うのですが、保護者の皆さんの理解と協力によって何とか担任を勤める事ができました。その中で、低学年からの言語指導の大切さを再認識することもできました。

現地理解に関する研修に取り組むことができたことも自分にとって、何にも変えられない財産になりました。特に小6を担当し修学旅行を計画・実施する中で、台湾の歴史の中で日本と日本人が残してきたものを知ることができました。また、その中で台湾に暮らす原住民の方々との交流を持ち彼らの持つ文化一端に触れることができたことも海外校に派遣されたからこそできたことだったと思います。

また、台中日本人会が毎年行う「秋祭り」や地元の小中学校との交流や高校での「日本語ボランティア」などを通して、日本の文化を紹介するだけでなく、台湾の方々の持つ日本と日本文化への関心の高さを知ることができました。

個人的に趣味のスポーツや写真で、地元の多くの方々と知り合いになれ、お付き合いをしていただいたことなど派遣先で得たことは語りつくせないほどあります。今後この経験をどのような形で教育活動に還元させていけばよいのか現在のところ思案中です。

最後になりますが、このような機会を与えてくださった方々と四年間の派遣期間を支えてくれた妻に深く感謝いたします。



小学部の修学旅行でお世話になっているパイワン族のルバルバさん



花蓮・台東間レースに参加

拙いものですが、私が台湾で実践したサトウキビを教材とした現地理解のための資料を添えます。

サトウキビの教材化について

現地素材を用いた生活科教材づくり

1. はじめに

台湾中部 台中県大雅郷に位置する台中日本人学校（以下 台中校）は、台湾製糖が所有する農場の跡地を借用しており、台湾という土地柄だけでなくサトウキビ作りと深い関わりを持っている。校舎近辺の空き地（現在は大きな工業地帯となっているが）や、台中校のグラウンドとプレハブ倉庫（仮設校舎）との間にある土手にも野生化したサトウキビが見られる。

2002年6月ころ、台中校の教頭が、用務員とプレハブ倉庫横にサトウキビを植え、子どもたちの教材用にと栽培してくださった。そのサトウキビの丈が約2メートル程度にまで育ち、十分に教材（食用）として成長したこともあり、同じ小学部低学年を担当した同僚とともに台中校と深い関わりを持つ、サトウキビを生活科の教材として扱うことを計画した。

ねらい

- ① 台中校と深いかかわりをもつサトウキビを学習することで、地域の歴史の一端を知る。
- ② 身近な食品である”砂糖”のはたらきや歴史を知る。
- ③ 食べ物づくりには手間がかかることを知り、食品を大切に作る気持を育てる。
- ④ サトウキビのしぼりかす（パガス）から、手漉き紙を作り、資源としてサトウキビをとらえさせる。

2. 本校近辺のサトウキビ栽培の現状

サトウキビは台湾では「甘蔗」と呼ばれ、古くから台湾を代表する農作物であり、精製された砂糖はかつて台湾を代表的する輸出品だった。しかし、人件費などコストの高騰や安価な輸入品の台頭により、製糖用のサトウキビの栽培は、ほとんど行われなくなった。私の知る限りでは、台湾中部地域に比べると台湾南部のほうが残されている畑の面積は広いようである。しかし、台湾の方々にとってサトウキビは、なじんだ味のの一つらしく、現在市内のあちこちで開かれる夜市には必ず、皮をむいた食用のサトウキビやサトウキビの搾り汁を売る屋台が見られる。そのため、小規模ではあるが紫色の皮を持つサトウキビが学校の近くでもわずかながら栽培されている。

台中校のプレハブ校舎横で栽培しているサトウキビも皮が紫色をした品種で、太さが5～6cm程度あり、茎に含まれる糖分も非常に多いものである。



サトウキビを売る屋台



3. 砂糖についてのオリエンテーション

本題材を子どもたちに提示するにあたり、低学年という事もあり、身近な食品としての「砂糖」をとらえさせるよう配慮し、指導にあたった。

実際の生活体験から、空腹時に甘いものを食べたときの感想を述べさせ、比較的近い時代まで砂糖は非常に貴重なものだったこと、サトウキビから実際に砂糖を作ることに触れ、子どもたちの関心を高めるよう心がけた。

4. サトウキビの刈り取りから原汁づくり

サトウキビの刈り取りは、鎌を使うため低学年の子どもには、危険で教師が実際に畑の横に子ども達を待たせ刈り取るようすを見せた。刈り取りの間に、子どもたちにはサトウキビの全体像や葉のスケッチなどを行わせた。

刈り取ったサトウキビは、小さな鎌で皮を剥ぎ縦に2つに割った後、約5cm程度に切り、そのまま子どもたちに食べさせるようにした。そのままでは大きすぎて口に入らないこと、低学年の子どもでは、力が弱く噛み切れない子どもも多く見られるため、カットした。

茎の中に、虫が入り込んでいるものもあるが、そんな場合には、サトウキビ汁の栄養価の話などをしてやるとあまり嫌がらずに口にしていた。両親ともに日本人の家庭に育った子どもにとっては、サトウキビの茎を初めて食べるという子どもも多く、その甘さにびっくりする子どもも多かった。

サトウキビ原汁を作る サトウキビ3本程度(2Kg)を用意

- ① サトウキビの皮を剥ぎ、二つ割りにした後長さ3~4cm程度に切りボールに入れる。
- ② 500ccの計量カップにカットしたサトウキビを入れ、
- ③ 同量の水とともに、家庭用のミキサーに入れる。
- ④ 粉碎された、サトウキビをサラシ布に入れ軽く搾り、原汁と搾りかすに分ける。



保護者にも協力いただいた。

30cmのボウルに一杯とれば十分。この段階で、子どもたちに味見をさせておくと良い。(煮詰めていくうちに甘さが変化していくことに気づかせられる。)

5. 砂糖づくりに挑戦

砂糖づくりは、火を使う作業のために、低学年の子どもには危険である。教師が作業し、それを見学しながら、ワークシートに作業の流れなどを記入したり、だんだん煮詰まって糖度が高くなっていく搾り汁の味を確かめさせたりした。

また、しぼりかすを圧搾器(家庭用のジュース搾り器)でしぼらせる作業も行った。予想以上に搾りかすからサトウキビの汁が得られた。

砂糖づくりの手順

搾り取った原汁を大き目のフライパン(直径30cm以上)に移す。

- ① 強火で沸騰させながら、水分を蒸発させる。
- ② 黄緑色のアクがたくさんでるので、ていねいにすくい取る。
量が半分程度になったら、小皿に取って子どもたちに味見をさせる。(甘みの変化に気付く)
- ③ さらに強火で加熱を続け、フライパンの底に1cm程度の量になったら、火を弱める。
(この段階では、かなり甘くなり黒糖独特の味もわかるようになってくる。)
- ④ 弱火でよく混ぜながら、さらに水分を蒸発させていきます。どろどろと粘りが出る。
このあたりから、黒糖の香りが部屋の中を漂いだし子どもたちもがまんできなくなってくる。
- ⑤ 授業の中では、さらに加熱を続け、カラメル状態にしてアメにした。アルミ箔でうすい皿を



作り、そこにカラメルを流し込んだ。(130℃くらいあり火傷に注意) 子どもたちがワークシート記入や片付けをしている間、冷凍庫で冷やして固める。

- ⑥ 自分たちが搾ったサトウキビの汁からおいしい、黒糖(黒糖アメ)ができたことで子どもたちも大喜び、子どもたちには、量の変化にも注目させた。

6. しぼりかすから紙を作る

サトウキビが資源としての有用性を持つことを知るためにサトウキビの搾りかす(パガス)から手漉き紙をつくる学習にも取り組んだ。

パガスだけでも紙は作ることができるが、かなり大量のパガスが必要になるため、今回の学習では牛乳パックのパルプと混ぜて子どもたちに紙漉きの体験を行わせた。

手漉き紙づくりの手順

- ① パガスをなべに入れ、5%程度の水酸化ナトリウム水溶液で約2時間程度煮る。
(たんぱく質を分解して、植物繊維だけにするため)
- ② サラシに取り、よく水洗いしておく。
- ③ 数日前より、濃い石鹼水につけておいた牛乳パック(1リットルパック10本くらい)から、表面にラミネートされているフィルムを剥がし、細かくちぎらせる。
(低学年の子どもたちに、フィルムを剥がさせる作業は大変ですが…)
- ④ 処理を終えたパガスと牛乳パックを合わせた後、ミキサーに水といっしょに入れ、粉碎。
- ⑤ ここまでが、事前の準備。これから、いよいよ紙漉き。
④のパルプを「おたま」でミキサーに入れる。そこに約1リットルの水を入れ15秒ほど攪拌。
- ⑥ バットに水を張り、枠にはさんだ網(A5サイズ)の上にパルプをお玉で3杯程度入れ、ムラの無いように広げ、静かに水から取り出し枠から外し、タオルで吸水。
- ⑦ アイロンで仕上げ、できあがり。



紙漉き作業は、低学年でもある程度慣れると上手にできるようになる。出来上がりを見ると白い紙パックのパルプの中に、褐色のサトウキビ繊維が見られ、なかなか趣のあるものになった。

作った紙は、時期的なものもあり、きれいな紙に貼り、クリスマスカードや年賀カードにした。

7. おわりに

現地素材の教材化の一つの例として、サトウキビを取り上げてみたが、子どもたちも興味や関心をもって取り組むことができたと思う。所属学年の関係もあるため、低学年を対象とした教材を作成としたが、学年の発達段階に応じて

- ・地元の方々にかつての学校周辺の様子を聞く
- ・作業手順などを自ら調べていく
- ・台湾における製糖の歴史やサトウキビの栽培の変遷について調べる。 など

子どもたちの活動を増やす事によって、中高学年の教材としても十分に活用できると思った。

参項文献 「サトウキビの絵本」すぎもとあきら編 農文協